

## 『爬龍船』(ハーリー)と『龍船歌』(ハーリー歌)

著者	王 耀華
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	14
ページ	329-355
発行年	1988-03-05
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00015659">http://doi.org/10.15002/00015659</a>

## 『爬龍船』（ハーリー）と『龍船歌』（ハーリー歌）

王 耀 華

一九八七年四月二十九日、私は照喜名朝一先生とご一緒に那覇市爬龍船振興会を訪ねた。そこで私は、吉浜照訓会長・東 敏雄先生のご好意で、「爬龍歌」（ハーリー歌）を聞く機会を得た。五月二日夜には、爬龍船振興会の皆様のご協力によって、録音を彩ることができた。五月五日昼過ぎには泊港で現地の龍船競漕も見学した。さらに、「爬龍歌」を採譜し、いくつかの「爬龍歌」や「爬龍歌」関係の文献資料も読んでみた。それらを基に次に、私の採訪報告と中国「爬龍船」、「龍船歌」について述べてみたい。

### 一、「爬龍船」の由来

「爬龍船」は民俗行事の一つとして、中国各地に広く流布している。その由来は、二千年前の中国の秀れた詩人の屈原と密接な関係がある。

屈原は、西暦紀元前三四〇年ごろに生まれ、西暦紀元前二七八年ごろに亡くなった。中国戦国時代（西暦紀元前四七五年―紀元前二二一年）の楚国の人である。かつて楚国の懷王を輔佐し、左徒・三閭大夫をつとめた。その「左徒」は楚国の官名で、国事の議論に関わって、号令を發布し、賓客をもてなす高官である。「三閭大夫」は楚国の官史として昭・屈・景の三姓の貴族を掌っていた。屈原は、自らの考えで、賢者と能者を取り立てて使う、主張した。また、競争することによって列国の支配者になることもよいと考えた。しかし、奸臣の讒言により、免職された。楚の頃、襄王（西暦紀元前二九八年―紀元前二六三年）の時に、沅水流域と湘江流域に追放された。その後、楚国の政治が傾むき悪くなり、秦国が楚国の国都の郢を攻めて奪いとった。屈原は、楚国の危難を救うことができないことを苦に、農歴五月五日、汨羅江に飛び込んで自らの命を絶った。屈原が死んだ後に、人々は彼的情熱的な愛国の精神に感銘を受け、毎年五月五日に爬龍船の行事を行って、屈原の遺体をとるようになったのである。人々は屈原の遺体が魚や蝦に食われてはいけないと河にチマキを投げて祈るようになった。

琉球王朝時代における爬龍船の由来は、史籍の記載によると、次の三つが伝えられていた。それは、三十六姓伝來說と長濱大夫伝來說と汪応祖伝來說の三つである。

一は、『琉球国由来記 卷九 唐榮旧記全集』で、以下のことが記載されている。

爬龍舟。盖為弔屈原而作也。本国原無此舟焉。窃按諸書、屈原楚賢臣也。事懷王、被讒貶

于江南。五月五日投汨羅江而死。楚人、每至此日、皆傷其死、並將舟楫以拯之。歷年漸久、改造龍舟。是乃龍舟之所由興也。今見、中華江村人民、每年五月、多造龍舟、競渡為弔。而稱之曰、為祝太平之盛儀也。然則本國、始設此舟者、蓋三十六姓、既到本國、然後為祝太平儀事、而能設此舟也、明矣。然本國從何世何年、始用此儀、未知其詳焉。

訳： 爬龍舟は屈原を哀れに思い追悼事である。琉球国には元々、このような舟がない。諸書の記載によると、屈原は楚の賢臣で、懷王に仕えていたが、讒言によって江南に追放され、農歴五月五日、汨羅江に身を投じて水死した。楚人は、毎年この日になると、屈原の死を悼み、そして、舟で屈原のなきがらをとりたいと願った。長い年月をへるにしたがい龍舟も改造されてきた。これが龍舟の興った由来である。中華の江村の人々はいま、毎年五月に、多くの龍舟を造り、龍舟の河渡り競争を行い、(屈原を)弔っている。太平を祝する行事と称されている。然るに、本國(琉球国)に始めてこの舟を設けたの閩人三十六姓である。彼らは本國(琉球国)にきた後、太平を祝うために、この舟を設けたことは明らかである。然るに、本國では、いつ頃からこの行事が始められたかは、はっきりしない。以上は「三十六姓伝來說」である。

二つ目は『琉球国旧記 卷四 爬龍船』の中の記載である。

(爬龍舟)俗諺曰：昔有長濱大夫者、曾住那霸西村、今呼其地曰長濱、姓名未伝。奉命入

閩赴京。己倣南京龍舟而回来。即五月造舟、競渡那霸津、以祝太平也。由是、毎年五月三日、乘龍舟者、必着白帷子、以泛于西海云爾。往昔有久米、那霸、若狭、垣花、泉崎、上泊、下泊等、爬龍舟數隻。今有那霸、久米村、泊村、三隻也。

訳：民間の伝説によると、昔、長濱大夫という人がかつて那霸の西村に住んでいた。それで今はその地を長濱と呼ばれているが、その詳しい姓名などは伝わらない。その人は命を奉じて閩（びん・福建）を経て京城に赴く。南京の龍舟を倣って琉球に帰る。五月に龍舟を作り、那霸津で競争させて、太平を祝う。それから、毎年五月三日になると、龍舟に乗る人は麻製の着物を必ず着せ、西海に舟を浮かべさせた。昔は久米・那霸・若狭・垣花・泉崎・上泊・下泊などに数隻の爬龍船があったが、今には那霸・久米村・泊村に三隻の龍船がある。

これは「長濱大夫伝来説」である。

三つ目は、『球陽』第五十三条目「龍舟競渡説」の中では、前述の二つの由来を挙げた後、次のように記載されている。

一説曰、南山王弟汪應祖、嘗至南京入（国子）監肄業、時看龍舟競渡于江心、甚慕之。己帰本国、卜地于豊見、臨江築建一城、以為栖居焉、名之曰豊見城。此時、汪應祖倣中華製法、創造龍舟。五月之初、浮於那霸江中、以為玩樂。人皆看之、亦製龍舟。至初四日、各邑龍舟、

必至城下、競渡前江、以備呈覽。至于今世、毎年端午前一日、那覇・久米村・泊村、爬龍舟三隻、必到豊見瀬威部前、豊見城祝女恭備祭品、以祈景福。龍舟人等、亦登津屋、向豊見瀬以行拜禮、自此而始焉、云爾。然而、歷世久遠、莫從稽詳焉。

訳：一説に曰く、南山王弟汪応祖、嘗て南京に至りて（国子）監に入り業を肄ふ。時に竜舟の江に競渡するを看て、心甚だこれを慕ふ。己に本国に帰り、地を豊見に卜し、江に臨みて一城を築建し、以て栖居を為す。これを名づけて豊見城と曰ふ。此の時、汪応祖、中華の制法に倣ひて、竜舟を創造し、五月の初、那覇江中に浮べて以て玩樂を為す。人皆これを看、亦竜舟を製す。初四日に至れば、各邑の竜舟必ず城下に至り前江に競渡して以て呈覽に備ふ。今世に至り、毎年端午の前一日、那覇・久米村・泊村の爬竜舟三隻、必ず豊見瀬威部前に到り、豊見城祝女恭しく祭品を備へて以て景福を祈る。竜舟人等も亦津屋に登り豊見瀬に向ひて以て拝礼を行ふこと此よりして始まると爾云ふ。然り而して歷世久遠にして従りて稽詳する無し。

これは「汪応祖伝來說」である。

要するに、「三十六姓伝來說」であろうと、「長濱大夫伝來說」であろうと、「汪応祖伝來說」であろうと、皆、中国から琉球に伝わり、そして、皆、屈原祈念と密接な関係がある。

しかし、琉球では、時代の変遷に伴って、爬龍船競争、龍船隻数、爬龍船の行事の内容なども、変

化していた。

爬龍船競争は、以上の記載のように、五月の端午の節句の民俗行事として挙行するが、また冊封使の款待行事の重陽宴のプログラムの一つとして、冊封使が琉球に来た九月九日に挙行された。これについては、胡靖『杜天使冊封琉球真記奇観』・張学禮『中山紀略』・徐葆光『中山伝信録』・李鼎元『使琉球記』などの冊封使関係文献の中に皆、記載されている。

以上の記載によると、遅くとも杜三策という人が冊封使として来琉した西暦一六三三年には、爬龍船が冊封使歓待のプログラムの一つになっていた。その前の状況がどうであったかは、冊封使録や他の文献に記載されていないため、はっきりしたことは言えない。

爬龍船の龍船数の面では、冊封使録の記載によると、西暦一六三三年の重陽節の時は六隻、一六六三年の重陽節には五隻、一六八三年には三隻、一七一九年には三隻であった。また、端午節の龍船競渡の場合には、『琉球国旧記』によると、「昔は久米村・那覇・若狭・垣花・泉崎・上泊・下泊などにある」ことから、それは七隻であった。「今は、那覇・久米村・泊村に三隻がある。」つまり、『琉球国旧記』が書かれた一七三一年には、すでに泊村・久米村・那覇の三隻だけが龍船競渡になった。そして、それらの三つの龍船は、それぞれ琉球・中国・日本のシンボルであった。

爬龍船の行事内容の面では、そもそもは琉球の爬龍船が中国と同じ屈原を哀れに思い追悼することであったが、琉球王朝時代には、龍船競渡によって、また祭祀を挙行することもあった。豊見城村の

祝女は、豊見城で祭壇を設けて祈願し、爬龍船の競渡者は豊見城に登って礼拝を行い、人寿年豊と盛世太平を祈った。同時に、国王の行幸を仰いで、聖顔を仰ぎ見、その聖寿万歳を祈願した。だから、昔の爬龍船は、琉球王国の一大年中行事となって、大い人心を湧かした。龍船歌は、その行事の重要な内容の一つであった。次にそれを検討してみよう。

## 二、中国における「龍船歌」

琉球「爬龍歌」を研究する前に、ここでまず、中国（特に福建）における「龍船歌」について、述べてみたい。

中国では、「龍船歌」は民間風俗歌の一種で、「龍船歌」ともいわれる。中国の南方各省・各民族に流布している。漢族と少数民族、それに、漢族各地の間でも「流船歌」の歌唱日期、歌唱曲調が少し相異がある。

歌唱日期の面では、漢族は端午の節句（農歴五月五日）で、苗（Miao）族は農歴五月二十四日～二十七日で、傣（Tai）族は潑水節である。

歌唱曲調の面では、漢族と苗族と傣族との間にはそれぞれ相異があり、各地の漢族でも同じではない曲調が使われる。しかし、共通点は、祭江儀式を行う時に、または船が停泊し休んでいる時に演唱する。競漕する時は、ただドラと太鼓を打ち、リズムを統一し、士気を鼓舞する。



記載によると、琉球王朝時代の「爬龍歌」は福建省の「龍船歌」と密接な関係がある。だから、ここに、福建「龍船歌」を述べて、参考に供したい。

福建の「龍船歌」は、中国の他地方の「龍船歌」と同じで、端午節の祭江競渡の時に演唱される民間習俗歌曲の一種である。

『重纂福建通志 卷十五 風俗』には、以下のような記載がある。

競渡、楚人以弔屈原。後、四方相承遂為故事。閩俗尤重之。

訳・楚の人は龍船競渡を以て屈原を哀れみに思う。後に、四方に広まって、故事になった。閩（びん・福建）の民俗行事ではもつとも重視されている。

調査によると、龍船競渡や「龍船歌」は、福建の各地にはほとんどある。ただ行事の時期、演唱及び歌詞・曲調はやや差異がある。また、内容は屈原を弔うこととは関係ないこともある。その中では、雲霄・詔安の「龍船歌」、仙遊の「龍鼓詩」、泉州の「採蓮歌」などに特色がある。

### 1、雲霄「龍船歌」

雲霄県の上谿一帯では、昔から、競渡の前に、必ず献江儀式を挙行する。献江の時に、舵手が紅旗を振り回すと、「龍船歌」を一人が領唱し、衆人が合唱する。

上谿の「龍船歌」は「献江歌」・「辞江歌」・「賞酒歌」に分けられる。その中の「献江歌」の音階はかなり特色があり、その音列は「f<sup>1</sup> a<sup>1</sup> (a<sup>1</sup>) b<sup>1</sup> c<sup>2</sup> d<sup>2</sup> e<sup>2</sup> f<sup>2</sup>」であり、旋律の中には常に増四度の音程

が現われる。曲想は勇壮で、悲憤・壮烈である。

獻江歌

♩ = 60

吟……吟連(獨)吟人 (伊)創(伊)造 連(伊)乾 (哪) 坤(伊)囉, (象)連囉  
 哩囉 哩囉 連囉 (獨)吟人(啊) (是)創(伊)造 (啊) 三界(伊)輪 (哪),  
 輪(伊)囉, (象)囉囉囉 噯 囉哩哩 連囉。

龍船歌

♩ = 72

(獨)鐘鼓一陣(囉) 開紛(啊)吟(囉), 家人齊來(囉) 祭(巫)原(囉), (家人)連囉 哩囉 連囉(啊)哩囉。

雲霄舟の荷歩一带では、龍船競渡の前に、まず「溜船」(船で廻り)を行い、その時に「龍船歌」を歌い、屈原を偲び、士気を鼓舞し、競渡の勝利を祈る。それらの歌の曲想は勇壮活発で、氣宇雄大である。音調はより実直である。

## 2、詔安「龍船鼓歌」

それは詔安県城の北門外の許姓門中の祖伝の歌である。昔、毎年四月一日から「龍船歌」を歌うことに始まる。毎日夜八時ごろ、多くの人々は、いろいろな燈籠を挙げたり、「龍船鼓舞」を歌ったりして、北門外の街道を廻っていた。その行列の最先端には二つの大きな燈籠、次に大勢の人々の燈籠の行列、さらに、二人の歌手（一人はドラを打ち、一人は太鼓を打ち）が「龍船鼓歌」を領唱すると、別の人々は帮唱する。演唱の曲調はより多様で、「十二月」・「九侯岩」・「五月五」・「廣寒宮」などである。それらの「龍船鼓歌」の帮唱は皆「Shio le, Shio le, Shio le, Shio Shio Shio Shio」である。それらの呼号は氣勢宏壮活発で、漕手らを勝利させるための鼓舞させる働きがある。

次に、「十二月」の曲譜を挙げる。

### 龍船鼓歌：十二月

$\text{♩} = 72$

正月里 是新年, 抱石投江 錢玉蓮, 脫落綉鞋 為表記, 連叫三聲

王狀元(哩) 王狀元。(Shio le Shio le Shio Shio Shio Shio)

### 3、仙遊「龍鼓詩」

「龍鼓詩」は仙遊県の楓亭鎮、莆田県の東沙、惠安県の北部地方に流布した民俗行事の歌である。

「龍鼓詩」の内容は、宋代末期の宰相（今の総理大臣）、陸秀夫のことをうたっている。中国の南宋の末に、モンゴルの元兵が南進した時、宋の宰相の陸秀夫は、宋朝に忠義をつくし元に降参しない幼かった帝昺を抱えて福建省の仙遊県楓亭鎮の北門にある佛水亭に逃れ、太子の帝昺が当地の蔡日忠という人の娘、蔡荔娘と結婚した。後に、陸秀夫は宋の国勢が危難で、ひきもどすことができないために、ついに三月三十日、太子を抱えたまま、崖山から海の深淵に身を投じて殉命した。それから、楓亭などの地方の人々は陸秀夫が投身した日の三月三十日になると、川のふちに「留春」(Liu Chuen)の名をつけて、太鼓を敲き「留春歌」を歌い、以て陸秀夫の霊を慰めた。

♩ = 89

龍 鼓 詩

(女齊唱) 龍 鼓 (兮) 唱 留 春, (男齊唱) 留 春 (兮)  
 吊 忠 魂, 春 光 難 去 (兮) 還 復 來, 忠 魂 不 眠 (兮)  
 千 古 存。 爬 龍 船, (男齊唱) 爬 龍 船, 爬 出 (啊) 龍 船 (啊) 快 如 雲。

「留春歌」の演唱は、一人が領唱し、衆人が合唱する。曲調は実直で、太鼓で伴奏したので、その太鼓は「龍鼓」と名づけられた。だから、当地の人々はその歌唱を「龍鼓詩」と称さした。

#### 4、泉州「採蓮歌」

「採蓮」は泉州市の古い民俗行事である。『泉州府志 卷二十 風俗』に次のように記載されている。五月初一日採蓮、城中神廟及鄉村之人、以木刻龍頭、擊鼓鑼、迎于人家、唱歌謠、勞以錢或酒米。

訳：五月一日には「採蓮」の行事を行う。城中の神廟および鄉村の人々は、木で龍頭を彫った。人々はまた、太鼓とドラを鳴らし、龍頭を家に迎え、歌謠を歌った。それが終わると、龍頭持ちの人に金、あるいは酒米で、その労をねぎらった。

「採蓮」の「採」は泉州方言で、汚れや濡れをふきとるという意味である。当地の人々は「採蓮」行事を以て悪魔払いと平安を祈る。昔は、毎年四月初めに、本地方の神廟内の木龍頭を抱くようにして持ちあげる出す、ゴミ置き場にて、線香を焼き、爆竹を燃やす。それを以て、悪魔払いを表わす。四月の末、神廟内で神銭を焼き線香を燃やして、龍頭を神霊に捧げる。同時に、泥で龍頭・人形・棗形燈を整えておく。五月一日の朝に、またさらに花を添える。それらを持つ人で採蓮隊を編成する。二人の男児が木龍頭をだくようにして持ちあげ、また小旗二、ドラ一、太鼓一、哨呐一、あるいは笛、拍板を加えて、楽器を演奏したり、歌を歌ったり、本地域の各家庭「採蓮」する。

「採蓮歌」は「採蓮」行事に歌われた歌である。その内容は、屈原を弔いあるし、平安を祈願するものもあるし、大自然の景物を賞するものもある。現在、流布している曲調は一首だけであり、唱う時常に变化する。歌詩の雖しが「唆囉嚏呵」(Solo Lian O)であるために、「採蓮歌」は「唆囉嚏」とも称されている。

採 蓮 歌

(獨)屈 月(吹) 初(獨)為 二國 起(吹) 為(吹) 鼓 聲 姓 (囉)(象)(象) 唆 囉 嚏 呵 呵 哩 呵 呵 哩 路 哩 嚏 囉.  
 (獨)五 月(哪) 初(哩)五 龍(哩) 船(哩) 行(哪) 名(象)(象) 呵 吼 呵 呵 哩 呵 呵 哩 呵 呵 哩 呵 呵 哩.

三、沖繩の「爬龍歌」(ハーリー歌)

前述のように、「爬龍」の民俗行事は、中国から昔の琉球に伝えられた。かつては重要な国家行事のひとつとして毎年五月五日に挙行された。

しかし、那覇市では、それらの行事は廃藩と共に消滅した。わずかに、日露戦役後の戦勝祝賀の際に爬龍船競漕が行われたことが最後の行事になる。近く、一九七四年沖繩国際海洋博覧会が、催され

ることを契機に、古い伝統ある爬龍船競漕の行事を再興し、今年まで第十三年に過ぎた。

現在、沖縄の「爬龍歌」は、那覇市では、那覇市爬龍船振興会『爬龍船再興趣意書』の記録によって、「泊爬龍歌」・「久米爬龍歌」・「那覇爬龍歌」などがある。採訪録音によって、曲調からみると、「泊爬龍歌」の曲調が二首、「久米爬龍歌」の曲調も二首あり、「那覇爬龍歌」の曲調だけは「久米爬龍歌」中の一首とほぼ同じである。

糸満市では、糸満ふるさと研究会『糸満ハーレー』（糸満市の民俗・文化Ⅷ第一号Ⅴ）によると、杉本信夫氏は「西村のハーレー歌」・「中村のハーレー歌」・「新島のハーレー歌」を採譜された。それらの三つの曲調はほぼ同じである。

沖縄の「爬龍歌」は中国の「龍船歌」と比較対照してみると、次のような共通点と変化がある。

#### 1、演唱の時期

前述の如く、中国の「龍船歌」は民族（例えば漢族・苗族・傣族）・地域（例えば福建省の雲霄・詔安・泉州などの地方）の相違に伴って、演唱の時期が変化することがあるが、しかし、元々の本格的な爬龍船行事は農曆五月五日に挙行された。だから、「龍船歌」の演唱の時期が普通は五月五日で、演唱は、だいたい龍船競渡する前の祭江儀式、あるいは「溜船」（船を廻り）の時に進める。龍船競渡する時には全て、ただドラと太鼓を打ち鳴らしリズムを統一する。

沖縄における伝統的な国家行事としての龍船競渡は、中国の「爬龍船」と同じで、農曆五月五日の

端午の節句に挙行する。このほかには、冊封使録の記録によると、爬龍船は冊封使歓待のプログラムの一つとして、冊封使が来琉した農曆九月九日の重陽節に挙行された。「爬龍歌」の演唱は中国と同じで遊び漕ぎで歌う。

## 2、演唱のリズム

前述した演唱の時期でいうと、中国と琉球の「爬龍歌」は全て、直接に龍船競漕の時には歌わず、よりのんびりした遊び漕ぎの場合に演唱した。だから、それらの「爬龍歌」のリズムは強弱がはっきりせず、より自由である。例えば、前に記載した中国の福建省の雲霄県上窖の「祭江歌」・荷歩の「龍船歌」はすべて、多くより自由で長いリズムである。沖縄の「泊爬龍歌(一)」・「久米爬龍歌(一)」のリズムは中国の曲例と同じように、より自由である。

## 3、演唱の方式

演唱の方式は全て、一人が領唱し、衆人が和唱している。ただ、領唱者はやや区別がある。中国の「龍船歌」の領唱者は通常、舵手が担当する。沖縄の「爬龍歌」の領唱者は通常、専任の歌い手が担当する。和唱者は全て漕ぎ手らである。

## 4、演唱の内容

中国の「龍船歌」の内容は、屈原を弔うことと関係ない場合もある。例えば、前掲した仙遊「龍鼓詩」は宋末の忠臣陸秀夫の哀れを歌い、詔安「十二個月」は民間の故事を歌っている。しかし、その



他の数多くの「龍船歌」は主に、やはり屈原を記念し、屈原の愛国忠君の精神を頌することである。

沖繩の「爬龍歌」は「爬龍」行事の内容が変化するのに伴って、それらの歌の内容も、中国の「龍船歌」と比べると、より大きく変化したものもある。それは、直接に屈原を弔う歌詞ではなく、主に豊年太平を祈願し、国王を尊崇する内容になっている。沖繩の糸満ハーレーの場合には、航海安全と豊漁を海の神に祈願することである。

注目に値するのは、現在の那覇市の爬龍歌の中に、漢語の歌詞が二つあることである。

一つは、「久米爬龍歌」の後半部である。那覇市爬龍船振興会『爬龍船振興趣意書』の中に、漢文と片仮名の読み方があるので、次に掲載してみる。

三隻龍船是弟兄	サンキルン	チュウ	シ	ティー	シュン
相駢相爬上豊城	シャン	ベン	シャン	パ	シャン
仰瞻聖顔咫尺間	エン	ニャン	シン	エン	チ
年豊民安楽太平	ニエン	フー	ミン	アン	ロウ
三隻龍船池中遊	サン	キ	ルン	チュウ	エ
彩童歌唱報隆恩	チャイトン	コウ	チャン	パオ	リユン
鳳凰台上鳳凰遊	フン	ハーン	タイ	シャン	フン
天朝仁徳如海深	テン	チャウ	ニン	テエ	ス
				ハイ	シン

也囉哩啞哩哢囉 エーローリー イヤーリールン ライ

それらの意味を日本語に訳してみる。

三隻の龍船は兄弟みたい、

共に頑張り共に競争して豊城に上る、

近いの間に聖顔を仰ぎ見、

豊年、平安・太平を祈る。

三隻の龍船は池の中で遊び、

着飾った童は歌唱して皇帝の恩に報い、

鳳凰の台上で鳳凰が遊び、

天朝の仁徳は海の如く深し。

囃子：エーローリー イヤーリールンライ

この歌詞の第二段は汪楫『使琉球雜録』に記録された歌詞と同じで、徐葆光『中山伝信録』に記された「龍舟太平詞」の内容とすこぶる近い。

つぎに汪楫『使琉球雜録』にある「龍舟歌」の歌詞を転録してみる。（那覇市史編集室『那覇市史資料篇一の3 冊封使録関係資料 読み下し篇』より）

三龍舟池中に遊び、彩童歌唱して重恩に報ひ、

鳳凰台上、鳳凰遊ぶ、天朝の仁徳、海の如く深し。

球国歌唱し、重恩に報じ、忠敬の両字、萬世の心、

一朝奏す九重の天、雙鳳書を啣みて碧淵を渡る。

風、玉音を送り帝徳を知り、雲捲き旌旗五色懸る。

炎海藐然として隔つ遠州、南屏北座中流に枕す。

福星臨照して隻つながら彩を呈し、草木建露を含みて下稠す。

気雲を呑み夢飛塵を壓し、恭しく聖澤を承け寵賚新なり。

自ら慚づ海岳の恩報じ難きを、忠誠の両字長紳に書す。

天地に挺す雙瑞の蓮、炎帝君に贈る荷蓋の錢。

金樽まだ盡さず酔を辭す莫れ、また看る秋鴻水仙を促すを。

太乙星移下りて階に泰く、長安の日麗しく三台を擁す。

帰帆自ら風神の佑くる有れば、萬里の長途一瞬なるかな。

錦舸言旋して帝京に入り、車書萬里昇平を慶ぶ。

大清の日月天照に當り、常に餘光ありて海域に到る。

二つ目は、「泊爬龍歌」の後半部である。那霸市爬龍船振興会『爬龍船再興趣意書』の中に、片仮名で漢語の読み方は記録されているが、漢語は記録されていない。次に、その読み方によって、漢語

に復元し、さらに日本語に訳してみたい。

(哎) 福州 一去 到

福州へ行いた

(噢) 到 新年 (哎)

新年に到る

さーぬぶてたぼちやる うふくらしや

やーん ぬくにやーにへおがま

(哎) 龍 船 三 隻

三つの龍船を

齊 劃 起

一緒に漕いで

さーぬぶちたぼちやる うふくらしや

やーん ぬくにやーにへおがま

(哎) 波 涛 号 淘

波涛の中を

劃 船 行 (呐) (哎)

龍船漕いで進んで行く

さーぬぶちたぼちやる うふくらしや

やーん ぬくにやーにへおがま

(哎) 彩 旗 三 枝

爬 上 河

さーぬぶちたぼちやる うふくらしや

やーん ぬくにやーにへおがま

三本の彩旗をとって

川の岸辺に上る。

以上の記録からみると、「泊爬龍歌」は代々、受け継がれている間に転訛したために、漢語の内容に誤りがあるかもしれない。今後さらに考証する必要があるが、基本的には意味は理解できる。

また、興味を覚えるのは、この「泊爬龍歌」の歌詞が漢語と琉球語と結合されていることである。各段の唱詞の中で、上句は漢語で、下句は琉球語である。

#### 5、おきなわ「爬龍歌」の言語

もちろん、沖繩「爬龍歌」は琉球方言に基づいて演唱する。だが、注目に値するのは、前に掲載した二つの漢語の歌詞が中国の北京音か、あるいは福建方言音であろうか。もし、福建方言ならば、福

建のどの辺の方言であろうか。

現在、その問題については、はっきり結論が出せないが、しかし、読み方からみると、「泊爬龍歌」の後半部の読み方は、より福州方言に近い。

次に、琉球における「泊爬龍歌」の片仮名と、それから推測した漢字の福州方言の読み方を対照してみたい。

「泊爬龍歌」の片仮名

福州方言の読み方

(哎) 福州 一去到 (噢) 到新 年 (哎)

福州 一去到 新年

(哎) 龍船 三隻 齊劃 起

龍 船 三 隻 齊 劃 起

(哎) 波 濤 号 淘 劃 船 行 (呐 哎)

波 濤 号 淘 劃 船 行

(哎) 彩 旗 三 枝 爬 上 河

彩 旗 三 枝 爬 上 河

また、唱詞の中に「福州」という地名が出現することは、その唱詞が福州と関係がある根拠に挙げることができる。

「久米爬龍歌」の読み方は、福建南部の漳州一帯の方言に、より近いと思われる。その中でも、「三隻龍船是弟兄、相駢相爬上豊城」の読み方が、もっと近くなっている。しかし、中にはまた、琉球語

化した北京音（即ち、「琉球官話」）が混入している。

それらの漳州方言の影響については、久米系家譜資料と冊封使録関係資料の記録を調べると、その解明ができるかもしれない。

那霸市史編集室『氏集 首里 那覇』（那霸市史 資料篇 第一卷五 家譜資料（一）別冊）の記載によると、久米村の姓氏の中で、元祖の出身地が福建省である門中は次の八姓氏である。

蔡氏 福建泉州府南安県人

毛氏 福建漳州府龍溪県人

王氏 福建漳州府龍溪県人

林氏 福建福州府閩県林浦之人

鄭氏 福建福州府長楽県人

梁氏 福建福州府長楽県人

陳氏 福建人

阮氏 福建漳州府龍溪県人

以上の記載の中で、漳州府龍溪県の出身の姓氏が一番多いことになる。

また、陳侃『使琉球録』の中には、次のような記載がある。

予に従ひて駕舟する者は、閩県河口の民約十の八なり。……上文云ふ所の、長年数人は、

乃ち漳州の人なり。漳人は、海を以て生と為し、童にして之を習ひ、老に至りて休まず。

風涛の驚きも見慣れ、渾べて閑事のみ。

それからみると、冊封使に伴ってきた漕手らは、漳州府出身の人が多かったのである。

以上の二点からすると、「久米爬龍歌」の読み方は漳州方言から影響を受けたとみられる。

## 6、音階、旋法

中国の「龍船歌」では、前掲した曲譜の如く、音階は中国の伝統的な五声音階（do re mi sol la）に属し、旋法は中国の伝統的な「五声性」旋法を使う。その旋法は、音級と音級の間には短三度・長二度の関係があり、半音の短二度の関係ではない。

沖縄「爬龍歌」の音階はすべて「do mi fa sol si do」の琉球音階である。旋法は長三度と短二度が特色の琉球旋法である。そのことについては、胡靖が『杜天使冊封琉球真記奇観』の中で既に記載している。

時に重九の宴。天使、競渡を斯の潭に観る。……遂に六龍の潭中に競渡するあり。

舟ごとに歌童十人を置く。頭に扇面団を戴く。製、金笠の如し。一金蝶を垂る。羽は鶯翅の如し。身に珠を被り、瓔珞・飛帯雜り垂る。仙童の様の如し。各々一描の金杖を執り、手に支へて舟中に立ち、夷調を斉唱す。

以上の記録によると、西暦一六三三年に、琉球の「爬龍歌」はすでに琉球風の曲調（夷調）を歌っ



ていた。その音階であったであろう。

末尾に、私が採譜した那覇市爬龍歌をあげておく。

あとがき

1、本研究を実施するにあたって、筆者は団 伊玖磨先生・岸辺成雄先生・呂驥先生のご推薦により、日本国際交流基金のご援助を受け、沖縄に居住して考察する機会を得るとともに、照喜名朝一先生・城間 繁教授・中村 透助教授のご指導を賜りました。また那覇市爬龍船振興会吉浜照訓会長・東 敏雄先生のご協力を得ました。謹んで、以上の先生方と国際交流基金に心から感謝申し上げます。

2、本論を日本語に翻訳するにあたり、牧志朝夫先生のご教示を賜りました。ここに謹んで心からお礼を申し上げます。

一九八七年五月三十一日 首里石嶺

#### 参考文献

- 『爬龍船振興趣意書』 那覇市爬龍船振興会 一九七四年 那覇  
『那覇市史 家譜資料(一)別冊 氏集 首里 那覇』那覇市史編集室 一九七六年 那覇  
『那覇市史 冊封史関係資料』那覇市史編集室 一九七七年 那覇  
『球陽』 角川書店 一九七四年 東京  
『琉球史料叢書 一、二 琉球国由来記』 井上書房 一九六二年 東京

- 『琉球史料叢書 三 琉球国旧記』 井上書房 一九六二年 東京
- 『糸満ハーレー』 (糸満市の民俗・文化Ⅷ第一号Ⅴ) 糸満市ふるさと研究会 一九八六年 糸満
- 『重纂福建通志』
- 『泉州府志』
- 『中国音楽詞典』 人民音楽出版社 一九八五年 北京
- 『辞海』 上海辞書出版社 一九七九年 上海
- 『福建民間音楽簡論』 劉春曙 王耀華 上海文芸出版社 一九八六年 上海

久米 爬龍歌 (一)

歌・東 敏雄 採譜・王 耀華

きゆふく ら しよ なが に びん(2) だてる よ。 ハーリー く ば  
 だの ら さー ず。 へーちり 居る はんま よ へちゆ せ  
 だく へー 久米 へんさ へんさ よ。 久米 へんさ はる  
 小ね へん(2) の ぼて よ。 ハーリー 久米 だん へんさ  
 よ。 へー世界 報 へん(2) て ぶそて よ へー世界 報 し て ら ハーリー  
 久米 へんさ よ。

久米 爬龍歌

今日 福らし也 ながに じや な立てる  
 爬龍 くにんだの へんさーよ  
 へー ちぶり 居る 花如 ちゆちやたくと  
 へー 久米の へんさーよ  
 久米の 走る 船の 豊見 城登て  
 爬龍 久米の へんさーよ  
 へー 世界 報 滑ぎ 浮きて 世界 報 しでう  
 へー 久米の へんさーよ  
 久米の 村や 水ゆい がやゆら  
 爬龍 久米の へんさーよ  
 へー ちたて 若者 の 並ぶる 美らしや  
 へー 久米の へんさーよ  
 首里 天 じやなし おかき ぶせみ しより  
 爬龍 久米の へんさーよ  
 へー お万人 の まぎり 揮下 しでう  
 へー 久米の へんさーよ  
 花の 里まが 花もい がいゆら  
 爬龍 久米の へんさーよ  
 へー 出て 見れ わらびと て せ見る な  
 へー 久米の へんさーよ

久米 爬龍歌 (二)

歌・東 敏雄 採譜・王 耀華

三隻	龍船	是弟	兄	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
サキ	ルシチヤ	シチー	江	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
相聯	相爬	上豊	城	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
池心	池バ	池フ	フ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
仰瞻	聖願	忍尺	間	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
エヤ	シシ	チチ	フ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
年豊	民安	楽太	平	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
エフ	シフ	ウタ	ビ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
三龍	船也	池中	遊	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
サキ	フウ	チフ	エ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
彩童	歌唱	報隆	恩	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
フウ	ウフ	ウフ	エ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
鳳凰	台上	鳳凰	遊	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
フウ	ウフ	フウ	エ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞
天朝	仁德	似海	深	也	囉哩	啞哩	啞哩	啞哩	啞哩
テフ	エー	江ウ	シ	エー	ロ-リ-	ヤ-リ-	ルン	リ	啞

泊 爬 龍 歌 (一)

歌・東 敏雄 採譜・王 權幸

く り ま 下 が せ ら ぬ ら ま だ せ ぬ が  
 し ゅ ら よ ハーリー と ま り の ハーサー よ エ き め の ん  
 で 左 ち め よ ハーリー と ま り の テ ハーリー と ま り の ハーサー よ

泊 爬 龍 歌

くりまでがせぬら 又うさかしまりよ  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 今日の出で立ち也 さだみぐりし也  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 こゝ人数揃りてしんじせなしめ  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 出で立ちゆる時也 さびせぬさ  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 石なぐり石たるなるまでん  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 うかまぶせぬしより うか下しり  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 泊走る船の豊見城のはて  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 世界報潜きうけて 走るがちゆらし  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 お盆下んし うか下しりから也  
 ハーリー泊のへんサーよ  
 うち左ゆい左ゆい ぬちちがま  
 ハーリー泊のへんサーよ

泊 爬 龍 歌 (二)

歌・東 敏雄 採譜・王 權幸

エ フレ イチ タク ハク タク 不 利 エ せ ぬ ぶ 下 左 ぼ 走 る う 不  
 く ら せ エ 何 何 何 何 フ タク シ せ ぬ ぶ 下 左 ぼ  
 走 る う 不 く ら せ せ ぬ 人 ぬ ぐ に せ に へ お が ま  
 エ 何 何 タク ハク タク 不 利 エ せ ぬ ぶ 下 左 ぼ 走 る う 不  
 く ら せ エ 何 何 何 何 フ タク シ せ ぬ ぶ 下 左 ぼ  
 走 る う 不 く ら せ せ ぬ 人 ぬ ぐ に せ に へ お が ま